

「左脳の一部と関係」

外国語の文法習得 分かれ目は▶▶

外国語の文法を習得する際の得意、不得意に関係する脳の部位を、酒井邦嘉・東京大准教授（言語脳科学）らの研究グループが突き止めた。年齢や習得期間に関係なく、左こめかみの裏側付近にある「下前頭回」と呼ばれる大脳皮質の一部の体積が、右脳の同じ部位よ

東大研究グループ

り大きい人ほど文法テストの成績が良いことが分かった。27日発行の米科学誌「ヒューマン・ブレイン・マッピング」に発表した。

生まれて初めて覚える母語と、成長してから習得する外国語では、学ぶ際の脳の働きは異なる。酒井准教授らはさまざまな年齢層と英語の習得期

「右脳同部位より大きいほど得意」

間を持つ日本人中高生78人、英語圏以外からの外国人留学生17人の計95人に英語のテストをし、成績と左右の脳の対称性との関係を調べた。その結果、左前頭葉の下前頭回にある550立方ミリほどの領域が右側に比べて大きい人ほど、文法テストの成績がよい傾向が分かった。つづりなどの語彙テストでは、関係はみられなかった。

この部位が大きいから文法能力が高いのか、文法能力が高いから部位が大きくなったのかは不明という。酒井准教授は「外国語が苦手な人には習得時間を増やすなど、個人の適性を客観的に把握し、教育するのに役立つのではないか」と話している。

【西川拓】